

特集

英語で育む、心・言葉・学び

令和2年度版 小学校英語教科書『Here We Go!』のご紹介

初めての小学校英語教科書で光村図書が目ざしたもの。それは、言葉・文化・価値観の異なる多様な人々と気持ちや考えを伝え合い、主体的に課題に向き合い、協力して平和な世界を築こうとする「開かれた心をもつ人」を育てることです。本特集では、アスリートの体験に裏打ちされた言葉や、実際の教科書紙面を通して、光村図書の理念をご紹介します。

特別インタビュー

よし だ ち な み
吉田知那美
(カーリング選手)

伝わると、
世界が広がる

聞き手
こ い ず み ま さ し
小泉 仁
東京家政大学教授・
小学校英語教科書
『Here We Go!』編集委員

ピョンチャン
平昌五輪の女子カーリングで、
銅メダルに輝いたロコ・ソラーレ(北海道北見市)の吉田知那美選手。
海外留学経験もある吉田選手は、カナダ人コーチとのコミュニケーションや、
海外メディアの取材などで、通訳なしの英語でやり取りをしています。
グローバルに活躍するためのコミュニケーション術や、英語との向き合い方など、
吉田選手の思考やエピソードに迫りました。

撮影：鈴木俊介(P2-7)

黒板ではなく、人と向き合う

小泉 吉田さんは、インタビューなどで、流ちょうに英語をお話しされている姿が印象的です。高校卒業後にバンクーバーに単身留学されたそうですが、どのくらいの期間行かれたのですか。

吉田 半年くらいです。もともと英語が得意だったわけではなく、留学すれば英語ができるようになるかもしれないと思ひまして(笑)。小さな頃から海外留学には興味がありました。

小泉 よく決断されましたね。留学を決めてから、英語学習に対する姿勢は変わりましたか。

吉田 中学校までは受験のためだけに英語を勉強してきたという感じだったので、目線が黒板にしか向かっていなかったんです。でも、英語に興味をもって勉強し始めた頃からは、目線が自然と人に向かうようになりました。書くだけでなく、人と話す英語を身につけたくて。

小泉 とてもいい話ですね。「黒板から人へ」というのは大きなポイントのように思います。

吉田 留学を決めてからは、知人に英語を話せる方を紹介してもらったり、AET(Assistant English Teacher)の先生と積極的にやり取りするようになったりと、英語を実際に使うために



「自ら興味や目標をもって
学ぶときに、
最も成長するものです。」

「何かを伝えたい
相手がいる、というのは
大切です。」



いろいろと行動するようになりました。

小泉 英語に対する姿勢が変化し、人と向き合うようになったわけですね。

吉田 はい。印象深いのは、高校で英語の手紙を書くという課題が出たことです。架空の設定で、好きな海外の俳優や歌手に手紙を書いてみるという内容だったんですけど、私は本当に手紙を届けたい人がいたんです。それで、当時、バンクーバー五輪に出場していたスイス人のカーリング選手に手紙を送りました。すると、その選手が選手村から返事を書いてくれて。とても感激したのを覚えています。

小泉 それはすごい。子どもたちが授業に臨む姿勢や態度はそれぞれですが、自ら興味や目標をもって意欲的に学ぼうと思ったときに、最も成長するものですね。

吉田 そう思います。やはり、何かを伝えたい相手がいる、というのは大切です。

英語が暮らしの道具に

小泉 留学先のバンクーバーでは、ホームステイをされていたんですね。

吉田 日系カナダ人のカーリングコーチの家にホームステイをしていました。彼らは日本語も

少しは話せるんですが、家ではなるべく英語でやり取りするようにしていました。

小泉 どんな話をされていたんですか。

吉田 やはり、カーリングの話が多かったですね。カーリングのテレビ中継を見ながら、英語の実況や解説に対して、「今何て言ったかわかる？」みたいな会話をよくしていました。

小泉 カーリングという共通の話題があったのは大きいですね。私は、言語習得には何か別の目的があったほうが効果的だと思っています。

例えば、日本に外国の方が来る場合、「和紙を作りたい」「盆栽を学びたい」といった目的がある人の方が結果的に日本語がうくなる。彼らにとっては日本語が道具になるわけです。吉田さんも、カーリングという軸があるからこそ、英語が道具として使われてきたわけですね。

吉田 はい。私には、生きがいであるカーリングという競技に深く関わるために、英語が必要だったんです。カーリング大国といわれるスコットランド、カナダはいずれも英語が公用語です。海外の選手が試合中に何を話しているのかわかれば、作戦の分析もできますし。

小泉 なるほど。こっちは日本語で「そだね～」なんて話しているから、相手は「英語はどうせわからないだろう」とたかをくくって、作戦会議が聞こえてくる。それにこっそり聞き耳を立てるわけですね。

吉田 そうなんです(笑)。とにかく、私はトップアスリートたちの仲間に入りたいという思いが強かったんです。

小泉 英語を使う必然性があったわけですね。吉田さんのように英語が生活の一部になったら、それは「外国語」ではなく「第二言語」ですね。

吉田 確かに！ 私は、英語そのものへの興味

というよりは、世界各国の人とカーリングの話をしたり、外国人コーチとやり取りをしたいから、英語を学んできたという感じですね。

素直な気持ちを伝えたい

吉田 カーリングには、試合後に勝ったチームが負けたチームにビールを奢^{おご}ってみんなで飲む、という伝統があるんです。私は小さいときからカーリングに親しんできたので、お酒が飲める

「生活の一部になったら、外国語ではなく第二言語です。」



「世界の選手たちの仲間に入りたかったんです。」

年齢になったら絶対に参加したいと思っていました。

小泉 へえ、面白いですね。酒席で冗談が飛び交ったとき、話についていけないとか、そういったことはありませんか。

吉田 カーリング仲間が日ごろから冗談を叩き込んでくれるので、何とか理解できています。カーリングをしていると、本当にさまざまな国の選手と話す機会があります。アメリカ、スコットランド、カナダ、スウェーデン、スイス、ロシア……。みんな英語で話すんですが、国によってクセがあるんですね。それでも、英語に自

信をもって堂々と話しているんです。

小泉 いわゆる、「英語の方言」ですね。英語でやり取りをして初めて、そういった異文化に気づけることもあります。吉田さんは、これまで英語で苦労したことはありませんか。

吉田 もう、失敗ばかりです。英語でインタビューを受けたとき、本当は日本語で話そうに素直な気持ちをそのまま伝えたいんですが、どうしても定型的な受け答えになってしまうことが

ありまして……。そろそろ、自分の気持ちをきちんと英語で伝えられるようになりたいと思っています。辞書を引いても、自分の気持ちや感情とニュアンスが微妙に違うことがありますよね。気持ちを表現するのは難しいなあ、と実感しています。

小泉 そういった欲が出てきたとなると、英語力がまた伸びそうですね。

1分間のタイムアウト

小泉 コーチとは基本的に英語でやり取りをするんですか。

吉田 日本代表のナショナルコーチはカナダ人なので、試合中も基本は英語です。

小泉 試合中のタイムアウトの時間はかなり短いですね。限られた時間でコミュニケーションをとるのは、大変そうです。

吉田 タイムアウトをコールしてから、コーチが私たちのもとに到着するまで1分間かかると。その間、選手だけで日本語で話し合い、自分たちの意見をまとめておくわけですね。そして、コーチが到着してからのもう1分間で、自分たちの意見を伝えたいといけません。

小泉 伝えたいことを手短かにまとめるというのは、日本語でも簡単ではないですね。

吉田 すごく難しいです。ですので、日ごろから意思疎通の訓練はするようにしています。

小泉 コーチは日本語も使うんですか。

吉田 基本的にすべて英語でやり取りをするんですが、「幅」という言葉だけ、コーチも日本語で「ハバ」と言うんです。幅というのは、ストーンが氷面でどのくらい曲がるかというのを示す言葉なんですけど、これは2文字なので日本語で伝えたいほうが早いわけですね。「You have to take this 幅」というように。タイムアウトが1分間しかない中で、わかりやすく簡潔に伝えるために、お互いの言語をうまく組み合わせながらコミュニケーションをとっています。



カーリングの試合でストーンを投げる吉田知那美選手
(株式会社スポーツビズ提供)



左／平昌五輪カーリング女子準決勝で、作戦会議をするロコ・ソラーレのメンバー。右から、吉田梨花選手、吉田知那美選手、ジェームズ・リンドコーチ、藤澤五月選手、鈴木夕湖選手(写真：ロイター/アフロ)

小泉 面白いですね。伝えることが最優先ですから、問題ないわけですね。基本的に吉田さんが中心となってコーチと会話するんですか。

吉田 そうですね。チームメイトもだいたいわかっているんですが、認識のミスがあってはいけないので、念のため私が日本語でもう一回伝えるようにしています。もう一度言葉にすることで、私の頭も整理されますので。

小泉 わかっていても言葉にすることで、考えが整理されるということはあるですね。

吉田 そう思います。あと、タイムアウトは、緊張していたり、ストレスがかかっていたりする場面でとるので、1分間を充実したものにするために、言葉遣いにも注意しています。気心の知れた仲間でも、感情的だったり、強すぎた

りする言葉は避けるようにしています。

英語をもっと身近に

小泉 子どもたちに英語を教えるにあたっては、どのようにして彼らの生活の中に英語を染み込ませるか、ということが課題になります。英文法の話ばかりしても、英語が嫌いになってしまいますし。吉田さんのように、英語が身近にあることが理想なのですが。

吉田 そういう意味では、2020年に開かれる東京五輪はとて素晴らしい機会になると思います。海外の人がたくさん日本に来るので、子どもたちに英語に興味をもってもらう一つのきっかけになるのではないのでしょうか。

小泉 タイミングとしてもいい時期なんです

吉田 知那美 よしだ・ちなみ

1991年北海道生まれ。ロコ・ソラーレ(北海道北見市)所属のカーリング選手。2014年ソチ五輪日本代表、2018年平昌五輪銅メダリスト。小学2年でカーリングを始める。高校卒業後にバンクーバーへ留学。海外メディアの取材や外国人コーチとの会話もすべて英語で行う。

小泉 仁 こいずみ・まさし

東京家政大学教授。元・文部科学省初等中等教育局教科書調査官。日本児童英語教育学会(JASTEC)会長。一般財団法人語学教育研究所顧問。小学校英語教科書『Here We Go!』、中学校英語教科書『COLUMBUS 21 ENGLISH COURSE』(ともに光村図書)の編集委員を務める。



ね。2020年は小学校英語が教科化される年でもありますから。町を歩いていても、テレビを見ていても、英語に触れる機会は増えるでしょう。子どもたちには、英語は知識を詰め込むものではなく、吉田さんのように、人と触れ合うための道具という意識をもってほしいです。

相手意識を育む「4つのたいせつ」

吉田 人と触れ合うときに、相手意識をもつというのは、すごく大事なことだと思っています。コミュニケーションのスタートですね。

- 小泉** 教科書では「4つのたいせつ」として、
- ・笑顔(Smile)
 - ・アイコンタクト(Eye Contact)
 - ・伝わりやすい声(Clear Voice)
 - ・相手への反応(Response)

を紹介しています。最近特に重要視されているのは、Responseでしょうか。相づちや聞き返す表現を使い、相手意識をもってやり取りするということですね。

吉田 これらのことは英語に限らず、一般的なコミュニケーションの基本ともいえますよね。相手の目を見てはきはきと話す、相手の話をきちんと聞くっていう。こういったことを英語の授業で改めて学ぶというのは、すごくいいことだと思います。

小泉 吉田さんのインタビューなどを見ると、



「相手意識をもつことは、コミュニケーションのスタート。」



海外の選手に笑顔で握手を求めたり、自分からハグをしたり、積極的にコミュニケーションをとっていますよね。そういった姿勢は子どもたちのよいお手本になると思います。

吉田 ありがとうございます。

小泉 私は、子どもたちには英語を学ぶというよりは、コミュニケーションを学んでほしいと思っています。英語はコミュニケーションを学ぶためのツールなんです。

吉田 英語がわからない場合でも、相手の表情やしぐさ、声のトーンから、何を求めているのかはだいたいわかるものですよ。

小泉 そうです。子どものときからこういった部分を英語から学ぶことで、「英語は相手がいって使うもの」という意識をもつことができます。あとはやはり、思いやりをもつこと。海外の人に対して、どんな小さい言葉でも一つかけてあげると、相手も気持ちが和らぐはずですから。

吉田 そうですね。日本に来てくれた海外の選手が、試合後に「ありがとう」と日本語で言うてくれることがあるんです。何よりも、こちら側に歩み寄ってくれて、言葉を伝えようと思ってくれたことがうれしい。だからこそ、私も積極的に英語を使っていきたいと思っています。